琉球新報　2010年（平成22年）1月6日　水曜日

教育は全県民が当事者

比嘉県教育委員長再任で聞く

組織の意義見つめ直す

2003年以降、任期1年での交代が続いていた県教育委員長人事で約7年ぶりに再任され、2期目を務めることになった比嘉梨香県教育委員長(50)に、ことしの抱負などを聞いた。比嘉委員長は07年4月に県教育委員に、09年1月に教育委員長に就任した。

再任され、2年目に向けた抱負を語る比嘉梨香県教育委員長＝4日、那覇市の県教育庁

―昨年の活動について。

「開かれた・行動する教育委員会」をテーマに活動した。的確な判断や意見を出すため勉強の機会を設けようと、できるだけ現場に足を運んだ。1年間に16校の学校と3館の図書館を訪れ、県内6教育事務所のうち5事務所で意見交換会や懇親会を開いた。多くの人と意見を交わす中で互いに課題を共有し、連携して役割を担う話し合いの場をつくれたと思う。

新しいことには時間とエネルギーがかかる。本業で地域振興のコンサルティングを業務にしており、コーディネートや段取りは日常的にやっている。委員との連絡など、できるだけ自分で動いた。

―11月に移動教育委員会を初開催した。

地域で教育にかかわる人たちの話を聞き、県民の教育に対する関心を高めるのが目的。教育はすべての県民が当事者。関心を高めることで、沖縄の教育を県民ぐるみで考えることができる。移動教委では、県教委の事業に関する点検・評価を議題にした。

―現場に足を運び見えてきたものは。

現場がすべてを教えてくれる。目で見、耳で聞き、肌で感じる大切さを感じた。問題が起きた時、向き合う時、具体的なことが見えないと解決できない。実際に目にしているからこそ、上がってきた案に委員それぞれの視点で意見を出せる。

―再任の抱負は。

「開かれた・行動する―」の昨年のテーマは継続する。同時に、教育委員会が合議制である意義をもう一度確認する1年にしたい。

県教委は沖縄で進める教育の基本的な方針などを決定する場。さまざまな専門的知識と経験を持つ6人の委員が現場の声を拾い、それぞれの視点から意見を述べ、何が良い方策かを話し合う。そこに中立性や公平性が生まれてくる。その意義を見つめ直したい。

再任の期待を重く受け止め、子どもたちの明るい未来のために頑張りたい。

（聞き手・山城祐樹）